

「1/2」は、赤青鉛筆が題材である。今はなかなか使わなくなってきたが、小さい頃などに誰でも一度は見たことがあるのではないだろうか。赤と青の色鉛筆が半分ずつ組み合わさって両方向から削っておけば一本で二色の役割を持つというのが売りである。彼女は新品の赤青鉛筆を、ちょうど赤と青の境目のところで切断した。赤青鉛筆が、赤青鉛筆である意味をなくしたのだ。机にきれいに並べられている複数の赤青鉛筆のうち、切断されているのは手前の1本だけ。しかし一つが切断されているとみんな切断されているかの様に感じてくる。アイデンティティを保っていた境界線の危うさが切断されることにより視覚化され、すべての信頼が揺らぐのである。「45°」も同じように、クリップの、「挟む」というそもそもの機能を失わせている。しかしその代わりに、見えなかった不思議なかわいらしい形が現れている。中の針金が外側の針金にちょうど接するように開くと45°になることを利用した作品だ。もともとの機能を奪いつつ、工業製品の持つ規則性を生かして、新たな形や感覚を生み出したのであった。

取り巻く環境の中から、感じるものをそのまま拾い上げる。感情やメッセージを入れずに、その感覚を明確に作品に仕上げる。大学生活の中で原田さんが見出した作品の方向性であった。

これから

大学にいたこの2年間で、アート作品や建築における自分の好みがわかってきたという。「それらの共通点や方法論をつなぎ合わせた、取り入れたりして卒論を書こうかなと思っています。でも、就職か大学院進学か…将来については、未定です。決まっているのは、来年選択する専門は建築に決めたことと、専門にするからには、将来の仕事につなげたいということです。」

将来がぼんやりしていて、模索しながら進んでいくところは、制作をしない大学生と一緒にようだ。そしてその模索が、大学生活において最も重要なのだろと感じた。大学とは、自分の芸術活動を1つの領域に絞らずに、可能性を広く試せる場である。原田さんはその場を生かしながら日々活動している。

私がみた制作者としての芸術学生は、学問に取り組むというよりも、自由に使える時間を自分自身の模索のために最大限利用し、試行している姿であった。やりたいこととやれることの間で悩みながらも新たな道を見つけ出していく。そうした先に、これからどんな作品が生み出されていくのであろうか。彼女の模索は、まだまだ始まったばかりである。



● 左図・white series より《シメジ》(2011)
● 右図・リンゴのデッサン (2011)

特集 2 つくばアートフィールド

伝えたい物語 伝わる物語 パステルで描く世界



● 自作絵本《そらいぬ》



● 羊毛フェルトによるマスコット(自作絵本のキャラクター)

Artist:

青野 広夢
AONO Hiromu

筑波大学芸術専門学群
美術専攻洋画コース3年

Writer:

名古屋 千尋
NAGOYA Chihiro

筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻2年

まどろむ動物たち

パステルで描かれた、静謐さと柔らかな風情を漂わせた動物たち。展示室の薄闇の中でみた額に入った彼らは、まどろむようなやさしい表情をしていた。

「人間を描くのは苦手だけど、動物を描くのは好きだった。動物以外を描いててもそのうち動物に戻ってる。」と話す作者の青野広夢さんは、洋画コースの3年生である。パステルを用いて絵本の中のような物語性のある、主に動物をモチーフとした作品を制作している。

頭の中では

作品の構想を考えると、「ビジョンが常に頭の片隅にあって、それが絶えず変化している」のだという。「イメージが湧くときは夢の中だったりする。動物が語りかけてくることがきっかけになったり。」普通に生活しているときにも複数の作品の構想が頭の中にあり、それを時々取り出しては次に描くものを考えるのだという。「描いている最中でも構想を温めてるんだ。だから描いてる途中からはじめに考えていた色から別の色に変えたりして、常に作品は変化していく。忘れないけど変化はしていくから、油だと乾くまでに時間がかかるのがネックで、パステルだと手早く描けるから気持ちが間延びしなくていい。スピーディに描けないと、思い描いたものが逃げて行ってしまう。」